

序言

我國に傳はり來りたる、漢音吳音の徑路について、これまで學者の間に
行はれ居りたる傳説は、古韻の研究に由りて、全く打破せられ、事實と異
なり居ること、明瞭と爲りたれど、なほ其上に、漢音吳音の特質、其の習
慣法の讀方、清音濁音の混用等につき、疑問に屬する者尠からず。之を人
に問ふも、多くは其考察朦朧として、明確なる答を與ふる者無く、稀に答
ふる者ありとするも、答ふる者の智識は、遙かに問ふ者の智識の下にある
が如く、感ぜらるることあり。他の問題の研究に附隨して、此問題にも亦
断片的の智識を得たる事多く、之を人に語るとき、新意見として耳を傾く
者あれど、それも空しく一場の談話として過ぎ去り、別に其痕を留むる
所無きを常とせり。

近頃知人に、漢音吳音につき、愚見の發表を乞はれ、我のみ聊か他人に勝りて、知る所ありとせば、之を後進の人に傳ふるも、天恩に報ずる義務の一端なるべしと思惟し、其勸告に應じ、組織を立てて新たに研究を試み、其結果を公表することとせり。問題が問題なるが故、多少専門的の智識を要することあるは、蓋し止むを得ざることなるべし。

昭和六年八月

大島正健誌

目次

第一章 漢音吳音の由來（音の部）…………… 一一

何をか吳音といふ…………… 一三

何をか漢音といふ…………… 一九

『韻鏡』と七音三十六字母…………… 二一

『韻鏡』と漢音吳音…………… 二四

漢音吳音の混讀…………… 二八

『韻鏡』と『古事記』…………… 三二

『韻鏡』と『書紀』…………… 三七

『萬葉集』及び其他の古書…………… 四四

隨唐交通前後に於ける傳來音…………… 四七

漢音は果して洛陽長安の音なりしか…………… 五〇

『韻鏡』と『唐韻』『廣韻』…………… 五四

『韻鏡』と『梵漢字彙』…………… 六一

第二章 漢音吳音の由來（韻の部）

概説。七三

東、董、送、屋	七五	先、銑、霰、屑	一〇一
冬、腫、宋、沃	七六	蕭、篠、嘯	一〇二
江、講、絳、覺	七八	肴、巧、効	一〇三
支、紙、真	八〇	豪、皓、號	一〇五
微、尾、未	八一	歌、哿、箇	一〇七
魚、語、御	八三	麻、馬、禡	一〇八
庚、獎、遇	八六	陽、養、模、藥	一〇九
齊、霽、霽	八八	庚、梗、敬、陌	一一〇
佳、蟹、封	九〇	青、迴、徑、錫	一一二
灰、賄、隊	九一	蒸、職	一一六
眞、軫、震、質	九二	尤、有、宥	一一七
文、吻、問、物	九三	侵、寢、沁、緝	一二一
元、阮、願、月	九五	覃、感、勘、合	一二四
寒、旱、翰、曷	九八	鹽、琰、豔、葉	一二六
刪、潛、諫、黠	九九	咸、蹟、陷、洽	一二八
總括	一二二		

第三章 漢音吳音の蹤跡……………一三七

音の部

- 一 吳音漢音對蘇州音廈門音……………一三九
 - 二 蘇州音と廈門音との頭音の對照……………一四一
- #### 韻の部

- 一 吳音對蘇州音……………一五〇
 - 二 漢音對廈門音……………一五三
- 無尾韻の豪・肴と、有尾韻の東・冬・江との關係、及び陽の韻の推移……………一五九

第四章 漢音吳音の還元……………一六五

- 唐代の標準音……………一六七
- 我漢字音の記法に對する注意……………一六九
- 音韻圖使用法……………一七一
- 『韻鏡』に由りて唐代音を求むる例……………一七五
- 漢吳兩音の還元に關する注意……………一八一

漢音の還元	一八二
吳音の還元	一八五
古代音と現代音	一八九

第五章 我古書の假名と漢魏六朝の古音

第一部

オの聲よりイの聲に移る類	二〇一
阮籍、詠懷詩	二〇五
徐幹、室思詩	二〇五
オの聲よりウの聲に移る類	二〇六
張衡、東京賦	二〇七
蔡邕、崔夫人誄	二〇八
弘衡、思立賦	二〇七
陳琳、飲馬長城窟行	二〇八
オの聲よりエの聲に移る類	二〇九
張衡、東京賦	二一〇
馬融、長笛賦	二一二
何晏、景福殿賦	二一〇
曹植、孔廟頌	二一二
牙喉の音と舌齒の音との母音に及ぼす強弱の力	二一三
無尾韻に對する有尾韻	二一四

第二部

漢魏音のエの聲・・・・・・・・・・・・・・・・二一九
漢魏音の分裂・・・・・・・・・・・・・・・・二二一

第三部

詩、魯頌、閨宮・・・・・・・・二二七
楚辭、九歌・・・・・・・・二三八
臨河歌・・・・・・・・二三八
楚辭、大招・・・・・・・・二二八
ヤの聲よりエの聲に移る類・・・・・・・・二二九
エの聲よりエイの聲に移る類・・・・・・・・二三一
張協七命・・・・・・・・二三一
謝朓、遊敬亭山詩・・・・・・・・二三二

第四部

アの聲を原音とする類（第一）・・・・・・・・二三三
アの聲の古音の假名に寫されたる二例・・・・・・・・二三六
詩、大雅、鳧鷖・・・・・・・・二三六
『古事記』仁德・・・・・・・・二三七
『書紀』欽明・・・・・・・・二三七
楚辭、漁父・・・・・・・・二三七
張衡、思立賦・・・・・・・・二三八
アの聲よりエの聲に移る變化・・・・・・・・二三八
阮禹、駕出北門詩・・・・・・・・二四一

附

記

此部所屬の者にオの聲の者あること	二四三
アの聲を原音とする類（第二）	二四四
アの聲よりエの聲に移る變化	二四六
第四部を舌韻と稱する理由	二四七
假名を基として判定する時代音	二四九
	二五五

第一章 漢音吳音の研究
(音の部)

中來

何をか吳音といふ

我國に傳來せる漢字の音には、漢音、吳音の二大類別を立てて、古くより用ゐ來りたれど、何をか漢音といふ、何をか吳音といふと、其本源を探らんとせば、忽ち幾多の解し難き、思ひ設けざる障礙に接觸することあるべし。普通一般の人は、只ありふれたる漢和字典などに附したる假名の使用に絶對信用を置いて、満足し居るのみなれば、往々常呼の音と字典の音と、相叶はざる場合に遭遇するときは、空しく不審の中に、其解決に惑ふに至るべし。

漢音と吳音とは、双方其由來に大問題あり。『日本書記』には、應神天皇の御宇、百濟より阿直岐、王仁來朝して經典を傳へ、菟道稚郎子此兩師に就いて教を受けられたる由記載あり。我國の學者、概ねその當時の漢字

の音を以て、我國に入りたる吳音の始なりとするに一致せり。其頃支那の南方と、朝鮮の東部との間に、航海の道開け居りて、寧波と百濟とに、交通の便ありたれば、百濟人の用ゐたる音は、即ち南音なるべかりしことと推斷せるなり。今その當時の朝鮮漢音に就いては、如何なる類の音なりしか、其證迹絶滅して文獻の徵すべき者無し。南の方百濟と相對し、北の方高麗に於いて、學校を建設して漢學を教授せり。而して、その用ゐたる所の音は北音にして、後に我國に傳はりたる漢音の始なりと、至つて手輕に論定する者あり。

されど、斯くの如きは、然る可き證據も無き臆斷に過ぎず。當時支那南北の兩音には、後世に於いて唱ふるが如き漢音吳音と稱する程の差異無かりしに似たり。遠く周の時代に溯り、詩と楚辭とに用ゐたる韻法を考査するに、各自特徴ありたりと雖も、南北の兩音密接にして、近似し居りたるを見るなり。降つて漢魏の時代に至りても、其詩賦に見えたる押韻より察するに、南北の兩音には、後世の如き懸隔ありたるを覺えず。

唐宗時代の韻を標準としては、到底解し得可からざる漢魏の韻は、我方に傳へられたる漢字の音の、古書に寫されたる者より推して、容易く判じ得べき者多きは、拙著『支那古韻史』に於いて、證例を擧げて示したるが如し。いはゆる萬葉假名の音に、吳音の名を附するは、實にいはれも無き事なり。漢魏音は北音なり。我が假借の字音の、之と一致する所多きは、取りも直さず、我方の音の、北音系に屬し居りたるを知るべし。なほ委しく言へば、其當時は未だ南北兩音の大別ありたるには非ざるなり。

我古書に寫されたる字音には、一樣ならざる者ありて、中には程遠き時代の古音を傳へられたるものかと思はるる者あり。其字の同じくして、其音の異なる者あるは、我方の轉用に基することもあることならんが、相隔たりたる時代音を代表したる者と見做すべき者も亦多きが如し。是れ我國と彼國との間に、交通の頻繁なりしを察するに足るなり。周秦の時代は姑く措き、漢魏の時代に在りては、彼方の詩賦の押韻法と、我方に用ゐられたる字音と、相一致して、能く其聯絡を保つを見れば、兩國の間に既に

交通の開け居りたること、争ふ可からざる事實なりとす。

魏の文帝の朝（或は云ふ、晋の武帝の朝）に在りて、我より彼に使したる者ありしは、彼國の歴史の傳ふる所なり。既に北地の朝に使用する以上は、其正使又從者の中に、其國の音に熟達せる者ありたるべき筈なり。随つてその使用したる言語は、いはゆる南方吳地の音に非ざるべかりし事明かなり。應神帝の御宇に於いて、百濟より始めて經典と其字音とを傳へたりといへるは、是れ朝廷の交通にして、民間にては之に先立ち、遠き昔の時代より漢字の智識の傳播し居りたることは、前に既に述べたるが如し。菟道稚郎子の王子、阿直岐、王仁の兩師に就いて、經典を學び、日ならずして、之を習得せられたりといふは、如何に聰明の方なりとて、不可能の事なるべく、是れ全く豫備智識の、熟し居られたるに因ることなるべし。

百濟より傳來の朝鮮漢音ありたりとするも、之を海路の交通に由りて、南方の吳地より轉入したる、南音と稱すべき必要無し。前漢の時代より、朝鮮半島の大部は漢人の勢力範圍の内に歸せり。其後幾多の變遷ありたり

と雖も、漢人の言語の殘存して、廣く傳はり居りたるべかりしことも自然なり。問題なる百濟の朝鮮漢音も、北方より移り居りたる音なるべかりしことも亦自然なり。たとひ寧波より輸入せられたる音ありたりとするも、其當時の南北兩音は、漢魏音を基とする、同系統の音にして、後世の如き懸隔の、兩者の間に生じ居りたるに非ざるが如し。我國に於いて之を吳音と名づくるは甚だ當らず。寧ろ之を古音と稱すべきなり。

漢魏の文化の行はるる處には、漢魏音其勢を占め、南の方吳越の地に在りても、先住民族の土音は、之に壓迫せられるに至れり。之に加ふるに、晋の時代に至りて、五胡の亂起り、十六國北方に割據し、漢民族の多數は南方に移遷し、隨つて江南の吳地、即ち今の上海、蘇州、杭州の方面に行はるる所の江南音に、漢魏音の系統を留むることと成れり。是れ古音の流派の、北方に比すれば、多く南方に存する理由なり。

六朝の末期に當り、百濟を経て佛教我國に渡來せり。南朝と直接の交通に由つて、入り來れる文字の音は、之を眞の吳音と稱すべく、この吳音は、

漢魏音と吳地在來の音と、混化したるものと見倣さざるを得ず。我方に於いて、通常佛家の誦讀する經文の音は、悉く之を吳音と呼びて可なる可きか、なほ疑問の存する者あり。其は入唐僧の歸り來りて、傳へたるものもあらんかと思はるればなり。三藏法師の漢譯せる佛書の誦經音は、如何なる類のものなりしか、これ無論北音なるべかりしと雖も、淺識なる筆者は未だ之を詳かにすること能はず。かかる問題は斯道の専門家の、熟知する所なるべければ、其教示を仰がざるを得ず。

何をか漢音といふ

我朝と隋唐の朝との間に、交通の開始せられてより、其當時の北音は、我國に傳はり來れり。唐代の文化は大いに我邦人に歡迎せられ、政治も文學も宗教も、彼の國の風に則ることと爲り、遣唐使も唐僧も歸り來りて、其の見聞し、其の習得したる所の智識を傳へ、随つて其文化傳播の機關と爲る、新來の北音は、世を舉りて尊重せらるるに至れるなり。時の次第に進むに従ひ、北音は洛陽・長安の都音として敬はれ、南音は吳地の鄉音なりとして疎んぜられ、平安朝の初期の頃なりといへるが、漢音吳音の名稱出で來り、北音を漢音と呼び、南音を吳音と唱へ、其吳音の中に、『古事記』『萬葉集』等の、古書に見ゆる所の、從來使用せる字音を悉く包括せしめたり。

右は漢音の由來につき、一般に承認せらるる所の説なり。其説の當否を定めんとせば、其音の本質に立ち入りて、根本的に之を究めざる可からず。此問題には多少の音韻學の智識を要するが故、稍細論に互るべし。是より漢音を論じて、吳音にも説き及ぼすこととす。

「韻鏡」と七音三十六字母

唐代の音韻を知らんと欲せば、『韻鏡』に據るに若くは無し。我國に傳へられたる『韻鏡』は、南宋の張麟之の作なる『指微韻鏡』なるが、我國にて享祿年間、之を寫して印刷に附したるを享祿本と稱し、之を原本として、其後多數の『韻鏡』世に出でたり。張麟之の作に先立ち、鄭樵が『七音略韻鑑』あり、『通志略』の中に入る所の者なり。此書は『指微韻鏡』の如き、宋音の混入少く、唐代の音韻を寫したるに近き、最も信賴すべき書なり。鄭樵は北宋より南宋に跨る時代の人なるが、何れの處よりか、『韻鏡』の古書を探し出だし、祕藏し居りたるものなるべし。

『韻鏡』は音 (Consonants) を横とし、韻 (Vowels) を縦として、音と韻とを組み合はせ、一見して要する所の字の音 (Pronunciation) を知る圖式の書な

り。音に七音三十六字母あり、韻に平、上、去、入の四聲を通じて、二百六韻あり。三十六字母は、晚唐の人の作にて、前人の作りたる、四十字母を省略したる者にして、二百六韻は、隋の陸法言の作なる、『切韻』を繼承したる、唐の『唐韻』、宋の『廣韻』に據る所の者なり。

當面の問題に關する者として、音の方の説明を試むべし。

七 音 三 十							
清 見	舌 音				唇 音		
	清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清
	泥	定	透	端	明	並	滂
	孃	澄	徹	知	微	奉	敷
							幫
							非

幫、滂、並、明は、p p' b mに當り、之を重唇音

と稱す。

非、敷、奉、微は、f f' v mに當り、之を輕唇音

と稱す。

端、透、定、泥は、t t' d nに當り、之を舌頭音

と稱す。

知、徹、澄、孃は、t' t' d' n'に當り、之を舌上音

と稱す。ty, ty', ty', ny'に類する音なり。

見、溪、群、疑は、k k' g ngに當る。

六 字 母 表													
音半圖	音半舌	音 喉				音 齒					音 牙		
清濁	清濁	清濁	濁	清	清	濁	清	濁	次清	清	清濁	濁	次清
曰	來	喻	匣	曉	影	邪	心	從	清	精	疑	群	溪
						禪	審	牀	穿	照			

精、清、從は、ts ts' dz に當り、之を齒頭音と稱し、

心、邪は、s z に當り、之を細齒頭音と稱す。

照、穿、牀は、ts (ts' dz) に當り、之を正齒音と稱す。

ts' y, ts' y, dz y に類する音なり。審、禪は、s z に

當り、之を細正齒音と稱す。sy, zy に類する音

なり。

影は、a e i o u、曉は、h、匣は、'a e i o u、

喻は、y に當る。影、匣には、consonant として

字母に當るべき者無し。

來は、l に當る。

曰は、j 又 n に當る。

「韻鏡」と漢音・吳音

一 漢吳兩音

I 清音は、兩音共に『韻鏡』の音と相一致す。

2 兩音共に『韻鏡』の次清音に當る者無く、之を清音の假名にて寫すを常とす。開の *ka* をカイ、天の *ten* をテンと記するが如し。折々は之を濁音の假名にて寫すことあり。朴の *po* をボク、灘の *tan* をタン、充の *ch'ung* をジュウと記するが如し。

3 兩音共に『韻鏡』の牙音の清濁音 *ng* を、加行濁音の假名にて寫す。我の *nga* をガ、宜の *ngi* をギと記するが如し。

4 兩音共に齒音の *ts* に類する音無く、之を皆佐行音の假名にて寫す。租の *so* をソ、字の *chi* をシ又ジ、車の *ch'a* をシャ、食の *tsok* をシ

ヨク又ジキと記するが如し。

5 兩音共に『韻鏡』の喉音の曉母^hに當る者無かりしより、之を加行音の假名にて寫せり。呵の^hをカ、漢の^hをカンに作りたるが如し。

二 漢音

I 『韻鏡』の濁音を清音の假名にて寫す。

重唇音傍の ^hong (bang) をハウに作り、舌上音重の ^hong をチヨウに作り、牙音極の ^hok をキヨクに作り、正齒音神の ^hen をシンに作り、細齒音續の ^hok をシヨクに作るが如し。

2 『韻鏡』の清濁音（唇、舌、牙）を濁音の假名にて寫す。

重唇音木の ^hok をボクに作り、輕唇音未の ^hu をビに作り、舌頭音奴の ^hu をドに作り、舌上音女の ^hu をヂヨに作り、牙音敖の ^han をガウに作るが如し。

3 『韻鏡』の喉音濁の匣母は、曉母の如く加行音の假名にて寫す。

何の ϕ (ϕ) を ϕ 、下の ϕ を ϕ と記するが如し。

- 4 『韻鏡』の清濁音の、喉音、半舌音、半齒音を假名に寫すこと左の如し。

y は也行音、i は羅行音、j は佐行濁音の假名にて寫す。

三 吳音

- 1 濁音は大體に於いて『韻鏡』の音と能く相叶ふ。

- 2 『韻鏡』の清濁音は、唇音の m を麻行音の假名、舌音の n を奈行音の假名、牙音の ng を加行濁音の假名にて寫す。

- 3 重唇音木の hok をモク、輕唇音未の me をミに作り、舌頭音奴の no をヌに作り、舌上音女 nyo をニヨに作り、牙音敖の ro をガウに作るが如し。牙音の清濁音を本濁音に作ることに、其形漢音に同じ。又喉音濁の匣母に對しては、加行濁音の假名を用ゐるを通則とす。又和行音を當つることあり。

胡の o をゴに作り、行の sub をギヤウに作り、又和の ba をワに

作り、黄の、*wong* (*wang*) をワウに作るが如し。

4 清濁音の喉音半舌音は、漢音に同じく、*y* と *l* とは也行音と羅行音との假名にて寫す。

半齒音は奈行音の假名にて寫す。

如の^ニを^ニヨに作り、而の^ニを^ニに作るが如し。

漢音・吳音の混讀

『韻鏡』に對する漢音・吳音の記法は、大略上記の如しと雖も、漢音・吳音久しく混用せられ、兩音の用法全く習慣讀と爲り、兩音混讀と爲れる者も亦尠からず。随つて清音濁音の別も、其用處明確ならざるに至れり。原音の同系統に屬する者なるに、士は上聲にしてシ、事は去聲にしてジ。詞は平聲にしてシ、似是上聲にしてジ。殊は平聲にしてシユ、樹は去聲にしてジユ。辰は平聲にしてシン、腎は上聲にしてジン。巷は去聲にしてカウ、學は入聲にしてガク。墳は平聲にしてダン、憚は去聲にしてタン。袍は平聲にしてハウ、暴は去聲にしてバウ、邪は平聲にしてジャ、謝は去聲にしてシャ、競は去聲にしてケイ、劇は入聲にしてゲキ、談は平聲にしてタム、憎は去聲にしてタムと讀むが如きは常呼なれど、只慣用といふのみ

にして、正常の理由あるを發見せず、士、詞、殊、辰、巷、憚、袍、謝、競、燐には常に清音の漢音讀を與へ、事、似、樹、腎、學、墳、暴、邪、劇、談には常に濁音の吳音讀を與へて、人の曾つて怪しむことの無きは奇なりを謂ふべし。

熟語には、清音濁音相接して、漢・吳兩音の混用せらるること、常に見當る所なり。時期、事件、地頭、近代、毒婦、權道、煩雜、鈍健、狂暴等は、ありふれたる例なり。清濁音にも亦同様の例あり。面目、眉目、門人、若年、萬民、無難、忍耐、母乳、埋沒、泥濘等は習ひ覚え、聞き覺えたる儘に、漢・吳兩音を使用し居るなり。尙ほ此上に『韻鏡』の濁音の字と、清濁音の字とを合はせて、其熟字に一々常呼の漢音と吳音の假名を附するときは、その混用の範圍は、更に擴大するに至るべし。

音に清音と濁音との間に於いてのみならず、漢音吳音の混用は普通の事實と爲り、注意せざれば、何れが漢音なるか、何れが吳音なるか、兩音の混讀を、覺り得ずして過ぎ行く者多し。甲乙、格式、家族、山妻、教頭、

淨化、行幸、卽興、百計、續發は其例なり。かくの如き事實は、古き年代より、我國に於いて使用せらるる所の、一般の漢字の上に行はれ來り、今日に至りては、何れの場合に漢音讀を用ゐ、又何れの場合に吳音讀を用ゐるべきか、標準として據るべき道無く、只習慣に従ふより外無きこと多し。兩音の差異に由り、意義に變化を生ずることあらば兎も角も、何れに讀みても同義なるときは、人皆潜かに捉へられ來れる、習慣の用法を怪しむに至るべし。

此の乾燥なる問題に、聊か興味を添ふるため、何人も熟知する所の、至つて平凡なる例を擧げて、其注意を喚起すべし。今といふ一字あり、之を古といふ一字と結び又對せしむるときは、漢音キン、吳音コンと讀むべき、兩樣の場合を生ず。されど何故にかく兩様の讀方を分つべきか、格別の理由あること無し。古今の二字、『古今和歌集』のときは漢音讀にして、『古今著聞集』のときは吳音讀なり。同字又古今無双ノ豪傑といふときは吳音讀なれど、今古英雄當末路といふ詩句のときは、漢音讀ならざる可からず。

往古。現今の現今には、吳音讀を用ゐれど、今來古。往事茫茫の今來には、漢音讀を用ゐるを常とす。古人無復洛城東、今人還對落花風といふ詩句にて、古人はコジンとして漢音讀、之に對する今人はコンジンとして、吳音漢音混讀を常とす。漢音吳音の讀分は、上例の如く甚だ煩はしといへども、さればとて、之を打捨て置きて可なりと言ふこと能はず。如何に面倒なりとて、一字なりとも讀み誤ることあるときは、良師に就いて正當の教を受けたること無き自己流の俗學者なりとて、忽ち人の嘲侮を受くるに至るべし。

漢音吳音の混用は其由來遠し。今『韻鏡』の音と、我古書に寫したる漢字の音とを對照し、混亂の基は漢土の原音にあるか、將た我國の傳來音にあるか、其考查を試むべし。古書の代表としては、『古事記』と『日本書紀』とを選び、前に出だしたる漢音吳音の例に效ひ、『韻鏡』の濁音と清濁音とを基とし、我方の假名と其音を比較すべし。『韻鏡』と古書とは、その用字の音に、年代の懸隔ある者多きを忘る可からず。『古事記』音は専ら漢魏六朝の音に則り、『書紀』音は主として隋唐音に據れるものの如し。

「韻鏡」と「古事記」

一 「韻鏡」の濁音に對する『古事記』の假名は右側に・の符號を附す。

二 「韻鏡」の清濁音（喉音と半舌音とを除外す）に對する『古事記』の假名は右側に△の符號を附す。其中獨り牙音に對する假名には▲の符號を附す。

左に、『記』中の處々に散見せる者を抜き出して例に擧げ、假名と借字とを對照す。

アカダマ。	赤玉。	阿加陀麻 [△]
アギナ。	（姓の名）	阿藝那 [△]
アグラ	座	阿具羅
アダ。	（地名）	阿施

遺法
△

アヅ。サユミ。 梓弓

イザ。ナキ。 (神名)

イヅ。モヤヘガキツマゴミニ。

出雲八重垣妻込ニ

イブ。キ。 (地名)

イマ。ダ。 未

ウジ。 蛆

ウズ。メ。 鉦

ウチ。 (地名)

ウネ。ビ。 (地名)

ウベ。 諸

オダ。ヒ 穩

オホシナドミ。 (神名)

オホトノヂ。 (神名)

阿豆。佐由美[△]

伊邪那岐[△]

伊豆。毛夜幣賀岐。都麻基微爾[△]

伊服岐[△]

伊麻陀[△]

宇士[△]

宇受賣[△]

宇遲[△]

宇泥備[△]

宇倍[△]

意太比[△]

大科度美[△]

意富斗能地[△]

サ サ ゲ。	サ ギ。 リ	ク モ。 バ。 ナ。 レ	ク ビ。	ク ニ。	ク ヂ。 ラ	キ。 ビ。 ヒ ト	キ。 ギ。 シ	カ ヅ。 ヌ。	カ タ リ ゴ ト	カ ゼ。	カ ゲ。	オ モ。 ヒ カ ネ。	オ ホ ト ノ。 ベ。
(人 名)	狹 霧	雲 離	頸	國	鯨	吉 備 人	雉	(地 名)	語言	風	陰	思 兼	(神 名)

佐 佐 宜。	佐 疑 理。	玖 毛。 婆。 那。 禮。	久 毗。	久 邇。	久 治。 羅	岐。 備。 比。 等	岐。 藝。 斯	加 豆。 怒。	加 多 里。 其。 登	加 是。	加 宜。	於 母。 比。 可。 禰。	大 斗。 乃。 辨。
--------------	--------------	---------------------------	---------	---------	--------------	---------------------	---------------	---------------	-------------------------	---------	---------	---------------------------	---------------------

ヌ カ デ。	ニ。 ニ。 ギ。	ナ。 ガ。 ス。 ネ。 ビ。 コ。	ツ バ。 キ。	ツ ヌ。 ガ。	チ ド。 リ。	タ マ。 デ。	ゾ。	ソ ホ。 ド。	ス ズ。 メ。	ス ガ。 ハ ラ	シ ビ。	シ ジ。 ム。	チ シ ブ。
(人 名)	(神 名)	(人 名)	椿	(地 名)	千 鳥	玉 手	(助 字)	(神 名)	雀	菅 原	(魚 名)	(人 名)	(木 名)

糠 代。	邇 邇 藝 [△]	那 [△] 賀 [△] 須 [△] 泥 [△] 毗 [△] 古	都 婆。 岐。	都 奴。 賀 [△]	知 杼 [△] 理 [△]	多 麻。 傳 [△]	叙。	曾 富。 騰 [△]	須 受。 米 [△]	須 賀。 波。 良 [△] 又 須 宜。 波。 良 [△]	志 毘。	志 自。 牟 [△]	佐 斯。 夫。
---------	--------------------------	---	---------------	---------------------------	---------------------------------------	---------------------------	----	---------------------------	---------------------------	---	---------	---------------------------	---------------



ヌギ。	脱	奴棄。
ノ。ボリ	登	能 [△] 煩理
ハジ。カミ	蓋	波士 [△] 加美 [△]

右に擧げたる諸列に就いて比較を試むるに、『韻鏡』の音と、『古事記』の音とは、驚く可き程能く相合致するを見るなり。『韻鏡』にては清音なる奢を、人名・伊奢。能麻和迦（イザノマワカ）の如く、濁音のザに用ゐ、

『韻鏡』にては濁音なる伎と祁とを、國名・隱伎（オキ）、鳥名・加祁（カケ）と、清音のキとケとに用ゐ、又『韻鏡』にては濁音なる岐を、上記の例にて見るが如く、清音に用ゐたるは、實に少數の例外と見て可なるべく、或は後世傳來の音の、混用せられたるものか、然らざれば原音の誤寫に基きたるものと、考へ得られざるに非ず。

「韻鏡」と「書紀」

一 『韻鏡』の濁音を、『書紀』にては清音に用ゐたること多く、其場合には其假名の右側に○の符號を附す。

二 『韻鏡』の清濁音（喉音と半舌音とを除外す）を『書紀』にては濁音に用ゐること多く、其場合には、其假名の右側に▲の符號を附す。

左に、『紀』中の處々に散見せる者を抜き出だして例に舉げ、假名と借字とを對照す。

アサヂ。ハラ	淺茅原	阿佐膩。簸囉
アトトリ	跡取	阿都圖。喇
アハヂ。シ。マ。	淡路島	阿波旒。辭。摩。
アビ。コ	（人名）	阿弭古

オホチ。	オホバコ。	オビ。	オキタチ。	オキメ。	ウベ。	ウハツクニ。	ウチ。	ウチ。テシヤ。マム。	ウダ。	イセ。	イキドホロシ。	イキ。	アマダム。
(人名)	(人名)	帶	起立	(人名)	諾	上國	(地名)	打止	(地名)	(國名)	憤	(國名)	天飛

邑治。	於譜磨故。	於寐。	於己陀智。	淤岐米。	宇每。	羽播豆矩爾。	宇旄。	于苔旦之夜葬務。	宇儀。	伊齊。	異枳迺倍呂之。	伊祇。	阿摩儀霧。
-----	-------	-----	-------	------	-----	--------	-----	----------	-----	-----	---------	-----	-------

セ。タ。タ。チ。バ。ナ。
 ツ。テ。コ。ト。
 ト。コ。シ。ヘ。
 ド。チ。
 ト。ラ。ヘ。
 ト。ラ。カ。
 ナ。ビ。キ。
 ニ。ギ。タ。ツ。
 ニ。ヒ。バ。リ。
 ニ。ホ。ド。リ。
 ハ。カ。マ。
 ハ。ジ。カ。ミ。
 ハ。タ。デ。

(地名) 橋 傳言 長 同士 捉 十日 靡
 (地名) 𪛗 𪛗 𪛗
 (鳥名) 袴 薑 鯖手

齊。多。多。知。麼。那。
 都。底。舉。騰。
 等。虛。辭。陪。
 奴。池。
 等。邏。倍。
 菩。塢。伽。
 儺。弭。企。
 𪛗。枳。陀。豆。
 珥。比。磨。利。
 珥。倍。迺。利。
 婆。伽。麼。
 破。餌。介。彌。
 簸。多。泥。

ラ	キ	ワ	ヨ	ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	ヒ	ハ	ハ
バ	ナ	タ	ダ	マ	ト	ド	ス	マ	ツ	ト	テ	タ
ヤ	ベ	リ	ケ	ダ	ホ	リ	ビ	キ	パ	ツ	ベ	シ
シ		デ			ル			イ	ラ			
								リ				
								ビ				
								コ				
小林	員部	渡處	節竹	山田	廻	(人名)	結	(天皇御名)	松原	一	(人名)	果

烏	偉	和	余	擲	茂	謎	武	瀾	磨	毗	巴	婆
麻	儼	多	囊	摩	等	迺	須	磨	菟	菩	提	陀
野	謎	利	開	娜	倍	利	彌	紀	麼	徒	便	志
始		涅		屢	屢			異	邏			
								寐				
								胡				

右の諸例に就いて考査するに、『韻鏡』の濁音は、『書紀』の清音に當り、又清濁音は濁音に當る者多數を占むるを見る。是れ取りも直さず漢音系の音なり。此音は、隋唐交通以來、我國に傳へ入れられたる新音なりしが如し。當時唐代の文物大いに謳歌せられ、『書紀』は文體も漢文體を模し、特にむづかしき眩耀的なる文字を選びて假名に當て、強ひて用ゐ慣れたる古音を廢して、新音に改めんとする傾向ありたるものの如し。清音と濁音とに改易を施したるのみならず、圖の濁音のヅを、清音のトに改め、恭の濁音のゴを清音のキに改め、其外都のツをト、氣のケをキ、己のコをキに改めたるが如き、皆新音の渡來を示すこと明かなり。當時の學者未だ新音の智識に熟達せざりしに由り、自由自在に之を用ゐて、人名地名は更なり、百般の事物を寫すこと能はざりしが故、其の足らざる所は、舊來の假名を使用し、それがため舊音新音を混用し、折々は同系統の字に二様の音を附せしむるに至りたることあり。葦の破餌介瀬、松原の磨菴廢遷は其例なり。後世の漢音吳音の混用は、遠く既に此時代に、其源流を發し居り

たるなり。『書紀』音必ずしも皆新音なりと云ふべからず。中には『古事記』音と共に、往々古代の音を留めて傳ふる者あり。『書紀』に御家を彌移居と記す、彌夜氣と同音なり。又『古事記』に管原を須宜波良と記す、須賀波良と同音なり。移のヤも又宜のガも同韻に屬する周代の古音なるが降つて後漢の時代まで、其音を保ち來りたるかと思はるる證あり。此音は隋唐傳來の音に非ず。其の夙くより我國に傳はり居りたるを見れば、偶以て彼我往來の時期の古かりしを示すことと爲る。右は問題外ながら、事の序に附記す。

『萬葉集』及び其他の古書

我國語を寫すに假借したる漢字を、一に萬葉假名と稱するが如く、其材料豊富にして、同音に當てたる字の數も多く、且つ其音の變化をも窺ふことを得、洵に古音の寶庫として、尊重するに足るなり。されど其集の作り上げられたる長き時代には、字音の智識次第に普及するに至り、『古事記』音・『書紀』音分別する所無く混用せられ、それがため時代を區劃する書としては、其用を爲し難きを遺憾とす。

諸國『風土記』、『續日本紀』、『延喜式』、『新撰字鏡』、『和名抄』等に就いて、精細に調査を試むるときは、多少の收穫あるべしと信ずれど、多大の勞苦を要することなれば、今は之に堪へ難きを覺え、自ら手を下さずして、人の援助を乞ふこととせり。記憶に任せ、心づきたる所の、一二の例

を出だして、讀者の參考に供す。

『萬葉集』にヘグリノヤマを、平郡乃山と記す。『和名抄』に平郡は倍久利とあり。平も倍も『古事記』音にては濁音なり。平をへと讀むこと『書紀』音にして、倍をへと讀むに叶ふ。平の吳音はビヤウにして、漢音はヘイなり。平のヘイは平安朝初期の頃渡來の音なるべし。奈良朝萬葉時代の音としては、稍早きに過ぐるかと思はる。されど事實は事實なれば如何に之を説明すべきか。

『萬葉集』に又奈良に寧樂の二字を當てて雅名に作る。寧の吳音はニヤウ即ちニヤングの音なるを、其拗音のニヤを取り、之を直音に改めて、ナに移したるなり。寧も前例の平も、共に同韻に用ゐられ居りたるは、六朝末期の韻法なり。寧を漢音にてデイ又ネイと讀めば、平のヘイと相叶へど、寧よりナの音を取り、同時に又平よりへの音を取るは、其間に矛盾の存することと爲るべし。寧をニヤング（ニヤウ）と讀み、平をペング（ヘイ）と讀むは、時代音の差異を示すものなり。或は我國の漢音

吳音の如く、寧にニヤウ、ネイ、平にビヤウ、ヘイと、其原音並び行はれ居りたるものと見做す可きか。

『拾芥抄』に平安城の門の名を列記す。其中に陽明門を山氏の建てし所なりとす。ヤマの音に相當する、雅致ある陽明の二字を選みて、之に當てたるものなるべし。陽明の吳音ヤウミヤウ（原音ヤングミヤング）よりヤマの音を借りたるなり。明の拗音のミヤを、直音のマに作ることに寧の拗音のニヤを、直音のナに作るに同じ。門の名をヤウバイモンと呼ぶは漢音讀なり。其當時漢音吳音並び行はれ居りたるなり。

同抄に又美福門は壬生氏の造りたる所なりとす。ミフの吳音は美富に當る。因つて優美の上に、力ありてきこゆる字を選みて美福と爲し、漢音讀にてビフクモンと名づけたるものなるべし。

隋唐交通前後に於ける傳來音

五胡の十六國江北に割據し、之に壓迫せられて、漢民族は四散し、其地に殘留せる者も、其勢屏息して振はず。五胡各其方言を有したるべく、諸種族の雜居するに従ひ、その使用する所の言語も混化し、諸種の雜音並び行はれ、漢魏音の如きは、下層に潜める流派と爲りて、殆ど其跡を失はんとするに至りたるものの如し。此間の音韻の變遷は、之を證すべき材料の全く缺如せるを遺憾とす。北朝の時代と爲りて北魏・北齊・北周を經、隋に至りて、南北統一の時運に達せり。北朝の人の詩歌ありと雖も、南朝の文化を受けて、之に追隨したるが如き觀ある者多く、北方の特徴を現はしたるもの少きを覺ゆ。然るに、隋唐交通に際し、突如として『書紀』音の傳へられたるを見る。是れ我國人の豫知せざりし間に、北地に於いて音變

化の生じ居りたるを示すものなり。

此時期に先立ち、百濟より音博士を迎へて、其教を受けたることありしが、その傳へられたる音は、如何なる類の者なりしか今詳かならず。本居氏の『漢字三音考』に國史を引いて次の如く記せり。「繼體天皇の七年に、百濟より五經博士段楊爾と云ふ人を貢る。同十年、又同博士漢の高安茂と云ふ人を貢りて、段楊爾に代らしむ。又欽明天皇の十四年、易の博士、曆の博士など、番上下相代るべきを勅せらる。同十五年、五經博士柳貴參りて、固德馬丁安に代るなどと云ふこと見えたり。」云々とあり。

是等の人々は、如何なる音を傳へたるものか、定かならず。就中、漢の高安茂といへるは、漢人なるべければ、當時の漢音即ち北音を傳へたるには非ざるか。されど皆南朝との交通に際し生じたる事件なれば、遙かに飛び越して、北音を傳へたるものと思はれず。或は南音に類似せる、自家獨得の、殘存變化せる漢魏音を傳へたるものにてもあるべし。或はまた此人のみ漢人にして、他は皆百濟人なりしと云ふ意なりしかも知る可からず。

兎に角にも、是等の人々の傳へたるは南音なりしなるべし。彼方の字音を假借して、我假名を製作し、長き年代を経て、訛舛を生ずること多く、因つて一々原音に徴する必要を生じ、正音を窺ひ知るがため、音博士を聘するに至りたるものと察せらる。

漢音は果たして洛陽・長安の音なりしか

漢音といひ吳音といひ、其稱呼は延暦のころほひに起りたるものなりといへり。漢音は即ち北音にして、洛陽・長安の都音を代表し、我國に於いて、當時隆盛の唐代の文化を齎らし入るる機具として、一も二も無く歡迎せられ、其結果として、南音は吳地の蠻音として、擯斥せらるるに至れり。遣唐使・入唐僧などの歸り來りて、大いに新音を鼓吹せしに拘はらず、之を習ひ覚え、其音を假借したる假名を製作するに時日と勞苦とを要し、悉く新來音に據ることの、不可能なるが上に、吳音は既に廣く行はれ居り、世人之に由つて養はれ、之に由つて意を通じ、皆其便益を感じ居る際なれば、俄かに法令の力を用ゐて、之を廢止すること能はず。自然に任せて漢音・吳音の併置を許し、官廳は漢音、民間は吳音、上流は漢音、下流は吳

音、漢籍は漢音、佛書は吳音といふが如く、其用所自ら定まれるに至れり。斯くして漢音吳音の混用は、我國の文學歴史に於いて、避く可からざる事實と爲れり。

新來の音も亦訛舛を免れず、朝廷之を矯正するに、意を用ゐられたることの多かりしを見る。『漢字三音考』に斯く記せり。「持統天皇の御世に、音博士唐の續守言薩弘と云ふ者見えて、其後常に此職二人づつを置いて、字音を教ふることを掌らしめらる。又養老四年に、此者僧尼妄作別音、宜依漢沙門道榮學門僧勝曉等轉經唱禮餘音停之」といふ詔などもありき。神護景雲の頃も、大學寮の音博士唐の袁晋卿と云ふ人など見えたり。延暦十一年の勅に明經之徒、不習正音、發聲誦讀、既致訛謬、熟習漢音と。又同十二年の制に、自今以後、年分度者、非習漢音、勿令得度と。朝廷既に大學寮を設け、音博士を聘して漢音を教授せり。ここに漢音といへるは、唐代の原音なるべかりしこと明かなり。かく原音を教授したるは、我國使用の漢音の根柢を定めんと試みたるにあるなり。僧尼別音を作る、或は又誦讀訛謬を致す

と、記載しあるを見れば、讀經にも亦漢音を用ゐたるものかと思はる。以上の如く、朝廷の篤き獎勵ありしに拘はらず、原音の教授は、遂に失敗に歸し、其痕迹を後世に遺さざるに至りしは、漢音の由來を研究するに、切要なる材料を逸し去りたるなり。

入唐僧の請來本として傳へられたる、『梵漢字法華經隨羅尼』の寫本を一見したるが、之に載せたる漢字の音、我漢音に叶ふ者あり、又叶はざる者ありて、端無く一團の疑念を生ぜしめたることあり。此對譯につき細密に比較研究を試むるときは、得る所多かるべしと雖も、是れ全く著者の領分に屬せざる事柄にして、恰も門外より他人の屋內を覗き見るに均しければ、此問題は此方面に精確の智識を有する、他の専門家の力に、依頼するより外無し。尙更に進んで、或は傳來の場所と時代とを異にせるか、其寫字又誦法に異同ある、諸寺又藏書家の手に祕藏せられ居る、各種の梵漢對譯の、法華經隨羅尼本を對照して、比較考査を施す者ありとせば、漢字音の來歴に、貢獻すること多大なるべし。僅かに一語の發音なりとも、研究者の本

分としては、注意を拂ひて見逃すこと能はず。左に一例を舉げん。アイテル氏の『梵漢字彙』に、提婆達多を Devadatta 即ちデバダッタの音にて寫せり。之を當時の北音なりしとせば、漢音にて清音に讀む所のテイハタッタとは、直ちに正面衝突を起すべし。既に我漢音は北音を寫したる『書紀』音と、同系の音なることを斷定せり。其斷論未だ確定的ならざるものあり。此に於いてか、漢音は果たして洛陽・長安の音を寫したるものかといふ、大疑問起り來る。

『韻鏡』と『唐韻』『廣韻』

隋の陸法言、『切韻』を作る。此書既に世に残存せず。唐の天寶十年孫緬、『切韻』を増補して『唐韻』を作る。此書も亦散逸して、現存する者は、端本の儘なる、『寫本唐韻』あるのみ。されど『唐韻』の反切は、其當時之を引照したる、諸書の中に散見す。『唐韻』發刊の後、二百五十餘年を経て、宋の大中祥符元年、陳彭年等『唐韻』を重修して『廣韻』を作る。『韻鏡』は晩唐の作として傳へらる。本邦に渡來せる所の『韻鏡』は、原版の書には非ざるべきが、『唐韻』に據れる者と、『廣韻』に據れる者との二種あり。

『韻鏡』に排列せる七音三十六字母を以て、『唐韻』『廣韻』に載する所の、反切の切字と、對照せしむるときは、清音、次清音、濁音、清濁音、

能く相合致し、皆同種の音なるを示す。『廣韻』の如きは勅命を受けて編纂したる者なれば、其音は官府公用の音にして、洛陽・長安の標準音なる可かりしこと明かなり。『韻鏡』の濁音に對して清音を用ゐ、又清濁音に對して濁音を用ゐる、『書記』音の如きは、北地の何れの方面に於いて、行はれ居りたるものか、知らずと雖も、勢力ある中原音に背反する以上は、之を郷音として取り扱はざるを得ず。『唐韻』『廣韻』の反切のみにては、其の切字と韻字との讀方に從つて、歸字の音も區々に變はり來るべけれど、『韻鏡』の如く、字母の音の規定せらるるときは、歸字即ち求むる所の字の音は、動かざることとなるべし。左に數例を舉げて、『韻鏡』の字母と、『唐韻』『廣韻』の反切の切字、及び漢音・吳音との關係を示すべし。

婆

『廣韻』薄波切

薄

『唐韻』傍各切

兩字

『韻鏡』重唇音濁並母

婆は我が常呼の音にてはバの濁音なり。然るに此字『廣韻』薄波切にして、切字の薄は常呼ハクの清音なり。薄は又『唐韻』傍各切なれば、

其切字の傍にバウの音を與ふれば、薄はバクと爲り、随つて婆もバと爲るべし。されど傍をハウの清音に讀むときは、薄はハクと爲り、随つて婆は清音ハと爲るなり。今は清音の方を漢音讀、濁音の方を吳音讀と爲し居れど、常呼は兩音混用なり。反切のみを便りとするときは、不審を生ずること、免れ難しと雖も、『韻鏡』にては、此等の諸字皆濁音と定めてあれば、迷ふべき所無し。『唐韻』も『廣韻』も『韻鏡』と同音なるなり。

木

『唐韻』莫卜切

莫

『唐韻』模各切

兩字

『韻鏡』重唇音清濁明母

木は漢音ボク・吳音モクにして、莫は漢音バク・吳音マクなり。模は漢音ボ・吳音モなり。『韻鏡』にては木、莫、模の三字、清濁音の中に收む。『唐韻』同音なり。獨り漢音のみ濁音に作る。

屯

『廣韻』徒渾切

兩字

『韻鏡』舌頭濁定母

徒

『廣韻』同都切

屯は常呼トンの清音なり。徒渾切の切字の徒も常呼トの清音なり。吳音にては之を濁音にてヅと呼ぶ。徒に對する同都切の同は、常呼濁音のドウなり。常呼の音にては屯、徒、同の三字、清音と濁音と一致せず。『韻鏡』にては皆定母に屬して、濁音なるべきこと論無し。『廣韻』は同音なり。漢音之に従はず。

暖
『廣韻』乃管切
乃
『廣韻』奴亥切

兩字
『韻鏡』舌頭音清濁泥母

暖は常呼ダンの濁音なり。其反切の切字なる、乃は常呼ナイの音なれど、漢音讀にてはダイとも唱ふ。乃に對する奴亥切の奴には、常呼ドとヌとの兩音あり。『韻鏡』にては暖、乃、奴の三字、清濁音泥母に屬し、『廣韻』と相叶ふ。漢音のみは濁音讀なり。

喬
『廣韻』巨嬌切
巨
『廣韻』其呂切

兩字
『韻鏡』牙音濁群母

常呼清音にして、喬はケウ、巨はキヨ、其はキなり。『古事記』にて

は、其は濁音のゴに用ゐらる。之に従へば、喬はゲウ、丘はギヨ、となるべき筈なり。『韻鏡』にては、三字共に群母に屬して濁音なり。

字 『唐韻』疾置切

兩字 『韻鏡』齒頭音濁從母

疾 『唐韻』秦悉切

字は常呼濁音ジなり。然るに其反切の切字なる疾は、常呼清音シツなり。疾に對する秦悉切の秦は、常呼シンなれど、亦ジンの音もあり。反切の音と、常呼の音とのみを標準としては、字音確定し難し。『韻鏡』にては、字、疾、秦の三字、齒頭音從母に屬して、皆濁音なり。

『唐韻』之に同じ。之を清音に讀むは漢音のみなり。

習 『唐韻』似入切

兩字 『韻鏡』細齒頭音濁邪母

似 『唐韻』詳里切

習は常呼清音のシフなり。近習をキンジフと呼ぶが如く、兩音混用にて、習を濁音に呼ぶことあり。似入切の切字の似は、ジと濁音に呼ぶを常とす。詳里切の詳は常呼清音のシヤウなり。されば習、似、詳の

三字、清音と濁音との間に、其用法に疑を生ず。『韻鏡』にては三字共に濁音の邪母に屬して、誤る所無し。『唐韻』は同音なり。漢音は別系の音なり。

『廣韻』に次いで出でたる『集韻』は、初宋の音韻を代表したる韻書なり。其反切の用法は、『廣韻』と大同小異にして、中には其音『廣韻』よりは、更に『韻鏡』に近き者あり。『禮部韻略』も大體に於いて、『廣韻』『集韻』に則れるものの如し。元の『韻會』・明の『正韻』は、或は時代音を避けて、古音に従ふ傾向ありたるかも、知る可からざれど、清音濁音の別に關しては、唐宋の古音に比し、變調を呈する所ありたりとも覺えず。司馬光の作として傳へらるる、『切韻指掌』を見るに、七音三十六字母の排列は、『韻鏡』と異なる所無し。是れ表に作りたる反切圖にして、之に載せたる字母の音は、『唐韻』『廣韻』『集韻』又『韻鏡』と同一なるが如し。元の劉鑑が作れる『切韻指南』は、『切韻指掌』と同様なる韻圖にして、字母の音も亦之と異なる所無し。『康熙字典』も亦其卷頭に韻圖

を掲げたるが、其音韻には他に比して、別に變化無きが如し。

漢魏音を基礎として、傳へ入れられたる『古事記』音は、後世の吳音と爲りて廣く傳播し、これと同系を保ちて、連綿として續き來れる、支那本國の原音と、遙かに聯絡を保ちて、進み來れるを見るは、兩國音韻の歴史の上に、特書すべき事實なりとす。

『韻鏡』と『梵漢字彙』

是よりアイテル氏の『梵漢字彙』より、當面の問題なる字音に關する漢字を摘出して、『韻鏡』の音と比較を試むべし。著者未だ其對譯の原音を詳かにせずといへども、察するに唐宋時代の音なるべし。素より對譯なるが故、精確は期し難けれど、大體の上より見れば、其上に立てたる證據の、争ふ可からざるを悟るに至らん。先づ例に由り、濁音と清濁音とを基として、各音に屬する字を摘出すべし。

唇音濁

Bala

バラ

Bayana

バヤナ

婆・羅
梵・衍那[△]

Bhadra
 Bhagai
 Bhagavan
 Bhani
 Bhikhu
 Bhima
 Bhūtas
 Binjisara
 Bôdhi
 Brahmana
 Buddha
 Buddhantra

バドラ
 バガイ
 バガバン
 バニ
 ビク
 ビマ
 ブータス
 ビムビサラ
 ボデ
 ブラマナ
 ブツダ
 ブツダミトラ

跋・達・羅
 勃・伽・夷
 薄・伽・梵
 嬖・尼[△]
 比・丘[△]
 毗・摩[△]
 鋪・多
 頻・毗・婆・羅
 菩・提
 婆・羅・門[△]
 浮・岡、佛・陀、佛・
 伏・駄・密・多

唇音清濁

Madhaka	マダカ
Maha	マカ
Manavaka	マナバカ
Mandaka	マンダカ
Mandāra	マンダラ
Mōkchadeva	モクチャデバ
Mōkchala	モクチャラ
Muhūrta	ムクルタ
Mulagrantha	ムラグランダ
Mūlasamburū	ムラサムブル

舌音濁

Dana

ダンナ

末[△]杜[△]迦
 摩[△]訶[△]、莫[△]訶
 摩[△]納[△]縛[△]迦
 門[△]擇[△]迦
 曼[△]陀[△]羅
 木[△]叉[△]提[△]婆[△]
 無[△]叉[△]羅
 牟[△]呼[△]栗[△]多
 慕[△]羅[△]健[△]陀[△]
 茂[△]羅[△]三[△]部[△]盧

檀[△]那[△]

Dantāḥkagiri

ダンタロカギリ

Dēvadatta

デバダッタ

Dhārani

ダラニ

Diarma

ダルマ

Dhātu

ダツ

Divakara

ヂバカラ

Djina

チナ

Dronodana

ドロノダナ

Duchasana

ヅチャサナ

彈・多落迦山

提婆達多

陀羅尼[△]

達磨・曇摩[△]

駄都・頭陀[○]

地婆訶羅

陳那[△]

途盧諾檀那[△]

突含薩那[△]

舌音清濁

Naga

ナガ

Nagna

ナグナ

Nanda

ナンダ

那伽[△]

諾伽那[△]

難陀[△]

Naraka

ナラカ

捺落迦

Navadevakula

ナバデバクラ

納縛提婆矩羅

Nemindara

ネミンダラ

尼民陀羅

Nidana

ニダナ

尼陀那

Nimat

ニマツ

涅槃末

Nirabuta

ニラブタ

泥羅浮陀

Nirvâna

ニルバナ

涅槃、昵縛南

Nivāsana

ニバサナ

泥伐散那

牙音濁

Gāndhāra

ガンダラ

乾陀羅

Gāṅgā

ガンガ

競迦、殑伽、強伽、恒伽

恒河

Gatch

ガツチ

揭職

Gāthā

ガタ

伽陀

Gāutama

ガウタマ

喬曇摩

Gāutami

ガウタミ

憍曇彌

Gayā

ガヤ

伽夜

Gēya

ゲヤ

祇夜

Ghōcha

ゴチヤ

瞿沙

Guna

グナ

求那

Gunamati

グナマチ

瞿那末底

齒音濁

Dhrya

ジヤナ

禪那

Djalandhara

ジヤランダラ

闍爛達羅

Dajimbala

ジヤムバラ

擔步羅

Djambu

ジヤムブ

瞻部

Djéa

ゼタ

逝・多

Djina

ジナ

視・那[△]、辰・那[△]、愼・那[△]

Djivaka

ジバカ

時・縛^〇伽

半齒音清濁

Djāna

ジャナ

若・那[△]

右は『韻鏡』の濁音と清濁音とを以て、梵語に當てたる漢字音と對照せしめたるなり。『韻鏡』の音と對譯の音と相合致すること、證例の示せるが如し。『韻鏡』と同系の音なる、『唐韻』、『廣韻』、『集韻』は、中原の正音を代表する者なり。アイテル氏の『梵漢字彙』は、實に之に裏書を與へたる者なりとす。

漢土に残存せる漢音系の音

以上述べ來りたる事實、的確にして争ひ難く、且つ我『古事記』音は、唐宋時代の中原音と、遙かに聯絡を保ち居りたるものとせば、隋唐音を寫したるものとして、傳へらるる所の『書紀』音の出處、更に問題と爲るべし。入唐僧圓仁即ち慈覺大師の傳へたりと云ふ、『法華經陀羅尼』の梵漢對譯には、『古事記』音あり、『書紀』音あり、是は唐代の原音を其儘傳へたるものなるべければ、當時彼地に於いても、兩種の音の並び行はれ居りたるものと、假定せざるを得ず。若し之を事實なりとせば、後世我國に於ける、漢音吳音の混用は、其萌芽を遠く彼國に於いて、發し居りたるものと、想像することを得べし。

諸寺に祕藏せる『陀羅尼本』の字に、異なれる讀方あるは、原音に據れ

るものか、又は後世規定せられたる音に據れるものか、確言すること能はず。陀羅尼にタラチあり、ダラニあり、婆にハあり、バあり、瞿にクあり、グあり、提にテあり、デあり、禰にネあり、デあり、泥にニあり、デあり、地にチあり、ヂあり、情にタあり、ダあり。其音と其出處を正すときは、或は傳來の時代音を推定し得ることも、出來能ふべし。

我國に傳來せる『書紀』音、卽ち漢音の原音は、彼の地の何方にてか存在し居りたることなるべし。古き頃佛家に傳へられたる經文に『漢音阿彌陀經』と稱する者あり、之をカンインアビタケイと唱ふ。佛說阿彌陀經、姚秦三藏法師鳩摩羅什^{ジテラス}詔譯と附記す。先づ如是我聞をジヨシガブンと讀み、音韻共に總べて漢音讀を用ゐること、菩薩をホサ、摩訶をバカ、孔雀をコウシヤク、鸚鵡をエイブと言ふが如し。普通讀と異なる者には、十萬億土をシフパンイクト、極樂をキラク、國土をケキト、稱讚をシサンと讀むが如き者あり。右は高野山に傳へられたる古き漢音讀に準じて、附せられたる假名なりと云ふ。其の古き漢音といふも、讀經の音なるべければ直

ちに彼國の人より口授せられたるものならんが、只之を邦人の口に唱へ易き音に改めて、假名を作りたることなるべし。是れ古音の殘存せる者にし、其の字數も多からずと云ふ。既に『阿彌陀經』の原音を承認する以上は、我國と交通往來せる地域に於いて、其原音の行はれ居りたるべきを、承認せざるを得ず。『阿彌陀經』の原音の、我國に傳はりしは、其時代を詳かにせざれど、其假名に現はれたる、韻の記法より察するに、宋以後の者にして、或人の考ふるが如く、唐代直傳の音とは思はれ難し。三藏法師詔を奉じて譯すとあれど、其音は同師が傳へたる者なりと云ふには非ず。慈覺大師の『法華經陀羅尼』も、三藏法師より傳授せられたる者として、祕藏せられ居れど、年代に懸隔あり、是れも其誦經法は、傳來の音には非ざるべし。

『韻鏡』と同系の音、中原に於いて其勢を占むる間に介在し、何れの地に於いてか、漢音系の音の、存在し居りたるは、事實なるが如し。

第二章 漢音吳音の由來 (韻の部)

概 説

前章に於いて、漢字の頭音を辿りて、漢音吳音の流域を探れり。是より韻字の變遷の痕を追ひて、漢音吳音の散布を原ぬべし。周代より唐代に亘る古韻の變遷に關しては、拙著『支那古韻史』にて詳述し置きたれば、必要の場合には、讀者は之を參照せらるべし。問題の漢音吳音には、直接の關係少ければ、隋唐の二百六韻を採らずして、現代の百六韻を用ゐることとせり。平聲の三十韻を以て主題と爲し、假名皆同様なれば、上聲去聲の字は、平聲の常用の字不足なるとき、之を補ふに用ゐることあるのみ。入聲の字は、耳立ちて聞こえ、目立ちて見ゆる所あるに由り、平聲の字と、並べて記するを常とす。

表に現はすは漢音にして、吳音、現代支那音、朝鮮漢音等は、必要の場

合之を附記す。表には人の知り易き字を擧げて、其の所屬の韻を代表せしむ。他は之より推して、判斷せしむることとす。

吳音は時代の異なる者を包括したるに由り、漢魏音あり、六朝音あり、近代音あり。たとへば、禰をネといひ又ナイといひ、弟をデといひ又ダイといふ類ありて、精細に其別を立つるは、本篇の期すべき所に非ず。只從來の習慣法に従ひ置くことと爲したれば、往々其音を寫すに矛盾の生ずること有りとするも、之を怪しまざらんことを希ふ。

諸音比較の中心は『韻鏡』にあり。『韻鏡』は諸韻を一等、二等、三等、四等の四種に分つ。是は響の最も強きを第一等、最も弱きを第四等と爲して、順序を立てたるなり。一等韻と四等韻とは直聲、二等韻と三等韻とは拗聲にして、一等韻と二等韻と直拗相對し、三等韻と四等韻と拗直相對することと爲る。『韻鏡』を參照せらるる者には、此別一見して了解せらるべし。此篇説明の便宜のため、等韻の名を用ゐることあるが故、此處に簡單なる説明を附記す。各韻の傍に羅馬字を附したるは、『韻鏡』の音なり。

東、董、送、屋

東	公	籠	竹、菊、六	なり。	東の韻中に	これは	るものと知るべし。
トウ	コウ	ロウ	六のチク、キク、リクは、チユク、キユク、リュクの略音	宿の音のシユクなるより推して之を知るべし。	にオウとユウとの兩聲あるは如何んとの質問起り來る可けれど、	これは兩聲接近せる時代ありて、其の次第に分れ來れる、變遷の跡を留む	
中	弓	隆					
チュウ	キユウ	リュウ					
禿	穀	祿					
トク	コク	ロク					
竹	菊	六					
チク	キク	リク					

冬、腫、宋、沃

宋	攻	彤			
ソウ	コウ	トウ	重	毒	躅
			チヨウ	トク	チヨク
			キヨウ	コク	キヨク
			シヨウ		シヨク
			燭		

四等韻にては、足・續は、漢音はシヨクなれど、吳音は『韻鏡』に従ひて、直聲にてソク、ゾクと呼ぶ。

右の東、冬の兩韻は、漢音は概して『韻鏡』に叶へるが如し。朝鮮漢音も粗之に同じ。

吳音にては兩韻別無かりし時代あり。東をツ、公をク、豊をフ、崇をスと呼ぶに對し、冬をツ、農をヌ、供をク、奉をフと呼び、此音稍延びて今

も殘存し、通[○]痛をツウ、空をクウ、崇をスウと呼ぶに對し、重をヂユウ、從をジユウ、封をフウと呼ぶこと常なり。是れ兩韻の混用せられたる、六朝時代の音を寫したるものなるべし。

漢魏音に至りては、東冬の兩韻は、其別明かにして、却て遠く隔たりたる、『韻鏡』の音に類似する所あるが如し。

降つて明の時代に至り、兩韻又別を失ひたるものなるか、『洪武正韻』にては、東の韻のみを置いて、冬の韻を省けるを見る。現代の南北兩官話にも、兩韻の別無し。

江、講、絳、覺

雙	江	邦	ang		
サウ	カウ	ハウ			
朔	覺	剝		hak	
サク	カク	ハク			

漢音は『韻鏡』と相叶はず。『韻鏡』にては此韻二等韻にして拗聲なり。江をキヤング (k'ang) といふが如し。南話は此音を持続す。楊子江をヤンダツウキヤングといふが如し。江の入聲の覺も随つてキヤクの音と爲るなり。官話にては覺は k'ang なり邦は元來ピヤンクの音なれど、唇音特有の變化にて、パングと爲り、漢音のハウと同形と爲る。随つて剝のピヤクもハクと爲る。官話にては邦は pang, 剝は pot なり。雙はシヤングの拗聲なれど、

漢音は之を直聲のサウに作る。朔のシヤクをサクに作るも同様なり。官話にては雙を shuang、朔を shòu に作る。南京官話即ち南話にては、平上去の三聲と、入聲との間に、ㄹ と ㅅ との母音變化あり。ㄹ は ㄹ ㅅ は ㅅ に同じ。

吳音にては江はコウにして、其入聲の覺もコクなり。即ち江の韻の、オウの聲なるは、上海音、蘇州音の、之を長音にて、ong と響かすと、同類に屬する者なるが如し。

朝鮮音は、江はカング (kang) にして、覺はカク (kak) なり。此韻の直聲なること、漢音と相應ず。

正韻は此韻を省きて、陽の韻に併合す。

江の韻は、六朝の末期に於いて、長く歩調を共にし來れる、東、冬の兩韻より分れ出でて、獨立したるなり。

離 之 知

リ シ チ 一

類 垂 追

ル ス ツ 三
イ イ イ

支、紙、寘

微、尾、未

機	キ	ㄱ
依	イ	ㄷ
威		ㄴ
牛		ㄹ
歸	クイ(キ)	ㄱ

支、微の兩韻は、漢音吳音共に今區別無し。兩韻の變遷其由來を異にする所あるを見れば、其別ありたるべきは自然なり。傳へられたる古音としては、支の方に己をコ、期・基をゴと呼び、微の方に氣・希をケ、衣・依をエと唱ふる事あるを見れば、兩韻の間に、差異ありたることを察し得べし。其は『支那古韻史』にて、委細に述べ置きたり。『唐韻』の支、脂、之の韻と、微の韻との間に、別を設けたるを見れば、其差異ありたるべけれど、邦人の耳には、隱微にして聞き分け難かりしが如し。支、脂、之の三韻は、南宗の平水韻にて支の一韻に改む。支、微の兩韻は、平水韻にも

其別を保有せり。『正韻』も亦之を分つ。

朝鮮音は此兩韻に關して、朝鮮特種の音ある者あれど、特に此處に擧ぐべき要無し。官話にては兩韻の別無きこと我音に同じ。

支・微の兩韻の代表として擧げたる諸字は、『韻鏡』にては、皆三等韻に屬す、而して三等韻は拗聲なり。開口音のチ、シ、リ、キ、イ等は、直聲なるか、拗聲なるか、我音にては判じ難し。合口音のツイ、スイ、ルイ、クイ、キに至りては説明を要す。此等は拗聲にてチユイ(chei)、シユイ(sui)、ルユイ(hei)、キユイ(kei)、ユイ(ei)と爲るべき格なり。然るに我方にてはかかる拗聲を嫌ひ、ツイ、スイ、ルイ、クイ、ウイ(キ)に改めたるなり。これ皆和音なり。開口音のtʃi, ʃi, kʃi, ʃiに合口音を代表するuを添へて、tui, sui, lui, kui, uに作り、其れより拗聲の符號を取り去れば、tui, sui, lui, kui, uと爲る。uをwに代へて、twi, swi, lwi, kwi, wiに改め、ツキ、スキ、ルキ、クキ、キの如く、從來の假名遣を用ゐるも妨無し。クイ又クキは後更にキに移る。

魚、語、御

居	牛ヨ	女	ヂヨ
書	シヨ	語	ギヨ
如	ジヨ	呂	リヨ

漢音能く『韻鏡』と一致す。朝鮮音も亦然り。官話は稍其響を異にす。此韻の字の直音讀を、字典などにて吳音と定むること如何ん。居士をコシ、虛無僧をコムソウ、證據をシヨウコ、論語をロンゴ、御前をゴゼン、疎をソ、於をオ、呂をロと讀むを皆吳音讀と爲す。されど同類に屬する字にして、嘗つて直音に讀みたる事無き字も其數多し。後世の人の容易に響かし得る拗聲を、先人は耳障として忌み嫌ひ、之を避けて直音に改めたる者も

其例少からず。外國語等にて、今日の兒童の、何の苦も無く發音し得る者を、今の老人の少年時代には、難澁を感じたる者の、頗る多かりしを知る。かくの如くにして、本音は拗聲なる者を、先人の直聲に改めたる者も、亦多かるべし。これ皆吳音に非ずして和音なり。左に非ざれば、平聲の魚をギヨ、之に對する上聲の語をゴ、平聲の初をシヨ、之に對する上聲の楚をソ、上聲の呂をロ、之に對する去聲の慮をリヨと讀むが如き、不統一の生じたるべき筈無し。尤も發音の法則に頓着せざる、理論一片の字引音には、魚にゴ、盧にロの假名を附したるもあり。右は縦列より見たる讀方なり。之を横段より見るも、同じ等韻に屬する者にして、直聲と拗聲と相混ずべき道理無し。漢和字典を見るに、貯に漢音チヨ、吳音トとあり。此字にトの音あること無し。是れ之に附したる丁呂切の反切の韻字なる呂にロの音ある者として、讀み誤りたるに源由す。貯は清音なり。之に對する清濁音の女を、漢音ヂヨ、吳音ニヨに作る、而して其反切は尼呂切なり。此度は呂に拗聲の漢音讀を與へ、しかも吳音ニヨと爲したるものなるべし。從來

の如く、此韻に直聲の吳音讀あるものとせば、説明し難き矛盾百出すべし。先人は殊に牙喉兩音のキヨ、ギヨといふが如き拗音を嫌ひて、コ、ゴといふが如き、直音に改めたるものの如し。魚をゴの音に用ゐたる例は餘り見當らず。雜魚をザコと唱ふるは、ギヨのゴに變はりたるものか、ザコは古き語にも非ざるべければ、轉音の確證の例とは爲し難し。齒音にも本音のシヨなる疎疏を、ソを常呼と爲し、又所はシヨなるに、餘所をヨソと呼ぶが如き例無きに非ず。我古書の假名にて、杼のヂヨをド、又叙のジヨをゾに用ゐるを常とせるは、拗音を直音に移したるなり。後世に至り漢音流行の時代と爲りては、最早拗聲は故障と爲らずして、原音其儘假名に寫されたるなり。吳音は漢魏音に始まり、漢音は隋唐音に始まりたることなれば、傳來の時代に懸隔ありたるを知るべし。

虞、麌、遇

模	○	
都	ト	
枯	コ	
誅	チ	ユ
無	ブ	ロ
區	ク	

漢音は大略『韻鏡』に叶ふ。朝鮮音粗之に同じ。但し等韻拗聲のユと爲るとき、唇、牙、喉の三音の下、之を直聲に移すを常とす。父をフ、矩をク、羽をウといふが如し。

吳音にては、オの韻はウの韻に當るが如し。鋪をフ、都をツ、圖をヅ、奴をヌ、蘇をス、苦をクと記するは其例なり。これ遙かに六朝中期以前の古音に該當するが如し。現今の官話にも、吳音と同じく、總じてウの聲を

用ゐるを見る。

六朝以前の古音は、『韻鏡』の音の基と爲り、書紀音と相應ずる所多きに似たり。都。をト、奴。をノ、苦。をコ、蘇。をソ、烏。をヲ、布。をホと唱ふるが如し。但し古音と書紀音とは、其頭音の清と濁と又清濁とに、一致せざる所あるは、前に示したるが如し。右の如き古音の痕跡は、北地に潜在し居りたるものなるべし。

邦人は短呼の拗聲を好まざる習慣ありて、漢音吳音共にヒユはフ、キユはクに改む。舌音齒音に於いても、短呼の拗聲を嫌ふものと見え、誅のチユ、主のシユ、乳のニユは、長呼に移りて、チュウ、シユウ、ニユウと呼ぶを常とす。

正韻は韻の題目、虞、夔、遇、を、模、姥、暮に改む。

齊、齋、霽

41

éi

迷

へい

題

テ
イ

笑鳥

ケイ

醫學博士

工

西

セ
イ

黎

21

漢音は『韻鏡』に叶ふ。朝鮮音之に類す。この諸韻の直聲なること『韻鏡』の四等韻なるを以て之を知るべし。正韻も題目を同じうす。官話はiの聲にて、『韻鏡』の音に比すれば、短呼なるが如し。

吳音はアイの聲にて、他と同じからず。題をダイ、妻をサイ、米をマイ、禮をライ、替をタイ、細をサイといふが如し。是は我國へ佛教渡來時代の南音にて、盛んに流行し、後には漢音と混化し、漢音を常呼とする者あり、

又吳音を常呼とする者ありて、別に理由も無き習慣讀と爲り居れり。たとへば、西を、東西のときは、吳音讀にてトウザイと唱へ、之を顛倒したる西東のときは、漢音讀にてセイトウと言ふが如し。

齊の韻をアイの聲にて呼ぶこと、現今上海、蘇州邊の吳地に於いては、既に其影を留めざるものの如し。遙かに南方に移り、福州の地方に於いて、此音尙現存す。

佳、蟹、卦

諧	佳	牌	
カイ	カイ	ハイ	ハヱ
懷	乖	稗	ハヱ
クワイ	クワイ	フワイ	

『韻鏡』は二等韻にして拗聲なり。漢音は直聲にして之に叶はず。朝鮮音は漢音に同じ。官話は拗聲にして『韻鏡』と一致す。吳音はエの聲にして、牌はへ、稗はフエ、佳はケ、乖はクエ、諧はケ、懷はエなれば、直拗の別一見しては判じ難し。上記の如き拗聲に對する、吳音特有の記法は後に説明すべし。漢音にはアイの聲の、下のイを切ることあり、佳をカ、釵をサ、娃をア、派をハ（フワ）、媯をクワ、晝をクワに作るが如し。

灰、賄、隊

ai

ei

開	裁	來
カイ	サイ	ライ
恢	摧	雷
クワイ	スワイ (サイ)	ルワイ (ライ)

「韻鏡」は一等韻にして直聲なり。漢音、朝鮮音、官話之に従ふ。吳音にはエの聲あり、開をケ、礙をゲ、代をデ、哀をエといふが如し。

今韻に、佳、灰の兩韻あるは、拗聲直聲の別を立てたるなり。漢音、朝鮮音は此別を失ふ。正韻は佳、灰を皆、灰に作りて拗直の兩韻を分つ。

眞、軫、震、質

人	眞	陳	
ジン	シン	チン	ㄷ
日	質	秩	
ジツ	シツ	チツ	ㄷ
倫	春	椿	
リン	シユン	チン	ㄷ
律	出	黠	
リツ	シユツ	チツ	ㄷ

椿はチユン、黠はチユツ、倫はリユン、律はリユツを本音とす。

漢音、吳音、朝鮮音、官話、大體に於いて『韻鏡』に叶ふ。正韻も同一なり。朝鮮音にては、入聲のㄷ（ツ）をㄴ（ル）に響かす。

文、吻、問、物

斤	キン	ㄱㅍ
股	イン	
訖	キツ	ㄱㅈ
君	クン	ㄱㅅ
屈	クツ	ㄱㅊ
鬱	ウツ	
屈はクユツ、鬱はウユツを以て原音に擬す。		

眞文の兩韻に對して、同一の羅馬字を附したれど、兩韻の變遷し來れる痕を原ぬれば、兩者の間に差異あるべきこと論を要せず。其は『支那古韻史』にて詳論す。兩韻の隱微なる別は、筆の上にては表はし難きに由り、同形の羅馬字を用ゐたるまでなり。開口音なる眞の韻の巾と、文の韻の斤と、又眞の韻の因と、文の韻の殷とは、如何なる別あるか寫し難し。合口音なる眞の韻の寤と、文の韻の君とは、一をキン、他をクン、眞の韻の筠

と、文の韻の雲とは、一をキン、他をウンと爲して別を設く。官話に徴しても、然るべき差別あるを發見せず。朝鮮音には、兩韻の間に、諺文の記法を異にする者あり。

吳音にては、文の韻の方にて、近をコン、隱をオン、乞をコツといひ、古音を傳へて、文、間、間をモン、物をモツといふと、相應ずる者あり。

元、阮、願、月

軒	蕪	鍵	肯	吞	根	恩	屯。
ケン	エン	ケン	on	トン	コン	オン	はツラン、
歇	謁	訐		屯	昆	尊	トツはツラツ、
ケツ	エツ	ケツ	non	トン	コン	ソン	昆はクラン、
袁	元	煩		突	骨	卒	骨はクラツ、
エン	グエン	ハン	not	トツ	コツ	ソツ	尊はスラン、
越	月	代					卒。
エツ	グエツ	ハツ					

はスラツの合口音なるを、我方にて開口音の形にて寫したるなり。